

# 日本留学試験「記述問題」における採点基準の見直し

村上京子 小室輝代 三谷閑子

## 要旨

2002 年度から始まった日本留学試験に「記述問題」が入った意義は大きい。しかし、その評価結果を実際に利用する上で、多くの問題点があげられる。特に、学部留学生が大学に入学した後に必要とされるレポートなどの文章を書く基礎力を測る基準としては、評価の観点が限定的で不十分であると考えられる。また、日本国際教育教会(以下 AIEJ)から報告された採点結果には天井効果が見られ、学習者間に差がつけにくいことは大きな問題だと考えられる。

そこで、新たに採点基準を作成し、入試選抜に当たって各大学が独自の評価ができるように AIEJ から送られてきた解答のコピーを用いて、3 名の評定者で独立に採点を行った。その結果、観点別に診断することのできる、より分散の大きい採点結果を得た。評定者間一致度も高く、十分な信頼性をもつことが確かめられた。また、日本語試験の他科目との相関が、AIEJ の採点結果に比べより高く、各観点間の相互相関が低いことから基準の妥当性も検証された。

今後、さらに異なる課題や形式、能力幅の広い学習者を対象に評価を行い、本研究の評価基準が適用し得るか否かに関して、さらに検討を重ねていく予定である。

## キーワード

日本留学試験 記述問題 作文の評価 信頼性 妥当性 採点基準 項目間相関  
試験の波及効果

## 目次

- 0. はじめに
- 1. 問題の所在
- 2. 方法
  - 2 - 1 対象および 評定者
  - 2 - 2 手続き
  - 2 - 3 課題
  - 2 - 4 採点基準
- 3. 結果

3 - 1 評定者間一致度

3 - 2 課題差

3 - 3 項目間相関

4. 考察

## 0. はじめに

日本留学試験は従来の日本語能力試験に比べ、多くの相違点があるが、記述問題が加えられたことは特に大きな変化といえよう。大学入学後、レポートを作成したり、試験の答案を書いたりするといったまとまりのある文を書くことは頻度も高く、学部留学生自身も困難と感じる技能の1つである(村上, 2003)。従来の言語知識の測定を中心とした試験から、産出能力を測ろうとする今回の試験科目の変化は大きい。この試験の波及効果は各方面に及ぶと考えられるが、特に大学入試にむけて行われる日本語予備教育において、書く技能が目標の1つに掲げられるようになったことは、大変意義のあることだといえよう。

しかし、作文の評価にはさまざまな困難が伴う。課題や出題形式など妥当性に関わる要因や評定の安定性・一貫性など信頼性に関わる要因などが従来しばしば指摘されてきた(平, 1991)。大学入試における小論文を分析した研究(小嶋・村上, 1991)では、課題により個人の評価の変動が大きいことが指摘されている。

その他にも日本留学試験「記述問題」固有の問題も挙げられる。現在、日本国際教育協会(以下AIEJ)による記述問題の採点は、文法的能力及び論理的能力各3点、計6点満点で行われ(注1)、受験者が希望する大学に採点結果が報告される。得点の報告とともに、記述問題に限っては、各個人の作文そのものの解答コピーも各大学に送られる。入試選抜にあたって、試験の得点とこのコピーが参照される可能性があるが、他の聴解問題など日本語科目合計得点は400点満点で、記述問題の得点はこの中に含まれない。記述問題は6点という非常に低い配点で、その標準偏差も小さい。平成15年度1回目試験の場合、平均3.9点、標準偏差1.4点と発表されている(注2)。各大学の入試担当者にとっては、400点満点の日本語科目合計得点は参考にしても、最大6点というあまり開きのない記述問題の得点は参考にしがたいと推測される。さらに、各大学独自で作文のコピーそのものを採点しなおすとしても、それには多くの時間がかかることと、多くの大学で入試判定には日本語教育の担当者がかかわっていないという理由から、送られてきた解答コピーは結局利用されていないのが現状である。しかし、この試験の利用のされ方は今後日本の大学へ進学を希望する学習者たちに大きな影響を与えることが予想される。記述問題が実施さ

れても、その結果が入試判定に十分反映されないことになれば、日本語予備教育機関においても、作文に費やす時間は減少し、他科目に力を入れるようになるであろう。

そこで、本稿では、送られてきた解答コピー(作文)を判定資料として利用するために、新たな評価基準を提案したい。このことにより、受験者の大学の勉学に必要な書く力をできるだけ速やかに判定でき、評価者間でゆれが小さい、かつ受け入れた大学で日本語を指導する担当者に多くの診断的情報を与うる基準づくりの基盤が与えられものと考えられる。

## 1. 問題の所在

日本留学試験の「記述問題」は、20分で2題の課題のうち1題を選択し、400字に意見とその根拠をまとめることが要求される。学習者からは時間制限が短すぎることで、文字制限について不満の声がある。また、大学入学後は、多くのかかり長いレポートが課題として与えられる。名古屋大学の調査(村上、2003)では、1年前期に1人平均7本の2000字以内のレポートを提出している。しかし、日本留学試験全体の時間的制約上、また多くの受験者の解答を限られた時間内に採点することからも、長文の作文を課すことは困難だと考えられる。レポートを書くための基礎能力をこの短い解答でいかに評価しうるかが問われることになる。

一方、受験生の立場に立てば、問題の傾向を知り、解答の書き方のパターンを準備しておこうと考えるのが自然であろう。多くの予備教育機関で、解答パターンの練習をしている。まず、賛成する意見について問題文を写し、「『…』という意見に賛成である。」という段落を書き、段落を改め、「なぜならば、…だからである。」とつなげる。最後にもう一度、「したがって『…』という意見に賛成である。」と締めくくると指導しているところが多いと聞く。このように答えれば、意見とその根拠が書かれるので、論理的能力は2点以上がつく。文法的能力も自ら作文する部分が少なく、「なぜならば」以下の部分だけが問題となる。

評価基準も、文法的能力は書き手の意図がわかれば、正確さが不十分でも満点がつき、論理的能力は主張の根拠が書かれてさえいれば2点以上となる。これでは、論理的展開などは評価されず、大学でのレポートなどで要求されるレベルのアカデミックな文章を書く能力を評価しているとはとても言えない。受験準備をする学習者にも、アカデミックな文章を書く技能を磨くための目標となる観点を示しているといいがたい。

現に2003年私費留学生入学選抜時に名古屋大学に報告された「記述問題」採点結果は、文法的能力で満点をつけられた受験者は、全受験者中68%、論理的能力では66%、合計点で55%にのぼり、明らかな天井効果が見られた。この得点は、入学後この留学生を指導する日本語

担当の教師にも有益な情報を与えるものではない。

以上のことから、大学の入試選抜に有用で、かつ入学後の日本語教育にも役立つ採点基準を作成することが急務である。同時に、採点基準の妥当性や結果が適正に利用しうるものであるかどうかを、実際の採点結果をもとに検討していかなければならない。今後の試験の波及効果を考えた場合、この試験の妥当性の検討は大きな意味を持つものとなる。

## 2. 方法

### 2-1 対象及び評定者

名古屋大学を受験した留学生の「記述問題」解答コピー121枚を、日本語教育に関わる3名の評定者が評価した。

### 2-2 手続き

1. 採点基準を作成するに当たり、日本語学校で大学進学のための予備教育を受けている留学生12名の記述問題の答案を対象に、評価基準の検討をする。その際、学部留学生に必要なとされる書く能力に関する資料(丸山:2003,村上:2003)や、これまでの作文の評価に関する文献(森田:1981,菊地:1987,齊山:1994,田中:1998)及びアカデミック・ライティングに関する文献(二通:2001)を参考にする。
2. 同じ採点基準を用いて評定者3名が独立に採点し、評定者間一致度(Cronbackの係数)を算出する。一致度の低い項目や、基準があいまいな点に関して協議を重ね、合意できる基準を作成する。
3. 新たな基準で対象となる「記述問題」解答コピー121枚の採点を評定者3名が独立に行う。
4. 評定者間一致度を算出し、信頼性を確認する。
5. 各観点項目別分析および項目間相関係数を元に採点基準の妥当性の検討を行う。

### 2-3 記述問題課題

2002年(2回目)「記述問題」の課題は以下の通りであった。受験者はかいずれかの課題を選び、20分間で400字～440字の文章を書く。

#### 課題

外国に行って、その国の人といっしょに仕事をする場合、ある人は、<A>その国の言葉はできるだけ上手に話せたほうがいい、と言います。またある人は、<B>その国の言葉はそれほど上手ではなくても、仕事

に必要な程度だけ話せばいい、と言います。あなたは <A>と<B>どちらの意見に賛成しますか。<A>か<B>のどちらかの立場にたって、その賛成理由を書いてください(句読点を含み、400 字程度)。

## 課題

野菜や穀物などを育てる時に、害虫を殺すための農薬を使うことがあります。ある人は、<A>農薬は人間の体によくないから使わないほうがいい、と言います。またある人は、<B>農薬を使わなければ十分な収穫が得られないので、少量なら使ってもいい、と言います。あなたは <A>と<B>どちらの意見に賛成しますか。<A>か<B>のどちらかの立場にたって、その賛成理由を書いてください(句読点を含み、400 字程度)。

対象者 121 名中、 を選んだ受験者は 33 名、 を選んだものは 88 名であった。

## 2 - 4 採点基準

予備的に対象外の同様のタイプの作文を用いて、採点基準を協議し、以下の7項目を決定した。基準の作成経過や評価する際のストラテジーに関しては小室他(2003)および三谷他(2003)を参照のこと。

### 1) 正確さ

- 5: ほとんど誤りがない(軽微な誤りが1,2箇所程度見られる)
- 4: 中上級レベルの誤りが見られる(軽微な誤りが3箇所以上ある)
- 3: 誤りが見られるが、初級レベル、重篤な誤りが1~2箇所
- 2: 初級レベル、重篤な誤りが3~4箇所
- 1: 初級レベル、重篤な誤りが5箇所以上

### 2) 文体(書き言葉)

- 3: 文体が統一されている
- 2: 文体が統一されていない(1,2文混じっている)
- 1: 文体が統一されていない(3文以上混じっている)

### 3) 表現の多様性

- 5: 話しことば が全く使用されておらず、かつ、レポート・論文に使われるようなアカデミックな語彙や、難しい文型が積極的に使用されている
- 4: 話しことばが全く使用されていないが、レポート・論文の表現としてはやや不適切なところがある
- 3: 縮約形や、終助詞、助詞の省略、俗語、感情表現 の使用が1,2箇所見られる
- 2: 縮約形や、終助詞、助詞の省略、俗語、感情表現の使用が3箇所以上見られる
- 1: 縮約形や、終助詞、助詞の省略、俗語、感情表現の使用が頻出する  
ひらがなの多用、体言止め(話しことば的表現とする)

#### 4) 文のわかりやすさ

- 3: 特にわかりにくい文がない
- 2: わかりにくい文が1、2箇所ある
- 1: わかりにくい文が頻繁にある

#### 5) 文と文の間の結びつき: 段落内で接続関係、指示詞、接続詞に論理的飛躍はないか

- 3: 接続関係が適切であり、問題がない
- 2: 接続関係の悪い箇所が1箇所含まれる
- 1: 接続関係の悪い箇所が2箇所以上含まれる

#### 6) 文章構成、全体構成

- 3: 段落構成・意味関係が適切
- 2: つながりの悪い箇所がある
- 1: 段落構成がなっていない、意味の整合性がとれていない 段落意識がない

#### 7) 内容

- 5: 根拠に論理的整合性があり、説得的である
- 4: 根拠に説得力が見られるが、十分ではない
- 3: 一貫してはいるが根拠が説得的ではない
- 2: 最初に述べていることと、結論が一致していない(一貫性がない)
- 1: 意見の根拠が示されていない(意見ばかり述べている)

### 3. 結果

#### 3 - 1 評定者間一致度

121名分の記述問題を採点し、3名の評定者間一致度(Cronbackの係数)を算出した結果、表1のようになった。課題 および 、全体において、評定者間一致度は0.9以上となり、信頼性としては十分に高い水準であることがわかる。

表1. 課題別受験者数・平均・標準偏差・評定者間一致度

課題	受験者数	平均(SD)	評定者間一致度
	88名	19.82(2.63)	0.91
	33名	19.67(2.61)	0.90
全体	121名	19.78(2.62)	0.90

表2. 観点項目別満点・平均・標準偏差・評定者間一致度

観点	満点	平均	S D	一致度
正確さ	5	2.56	0.92	0.81
文体	3	2.78	0.50	0.96
語彙の多様さ	5	3.33	0.66	0.77
文のわかりやすさ	3	2.09	0.58	0.73
文間の接続	3	2.47	0.48	0.59
段落構成	3	2.69	0.43	0.75
内容(論理一貫性)	5	3.85	0.63	0.69
合計	27	19.78	2.63	0.90

また、7つの観点ごとに見ると、「文間の接続」と「内容」はやや低いもの、それ以外の評定者3名の間的一致度は0.7以上と高い。したがって、この採点結果を分析の対象とすることとする。

### 3 - 2 課題差

2つの課題のうち1題を選んで解答する形式は、受験者の関心や知識による偏りを防ぐために小論文や論述試験でしばしば取り入れられるものだが、課題間の困難度の問題など妥当性の問題が指摘されている(平, 1991)。今回対象となった2つの課題、外国で仕事をする場合の外国語のレベルと農薬の使用の是非の問題については、表1に示すように平均・標準偏差ともにほぼ同じで、両課題間に難易度の違いはなかったと考えられる。したがって、どちらの問題を選んだかには関係なく両課題の得点を合わせて扱うこととする。

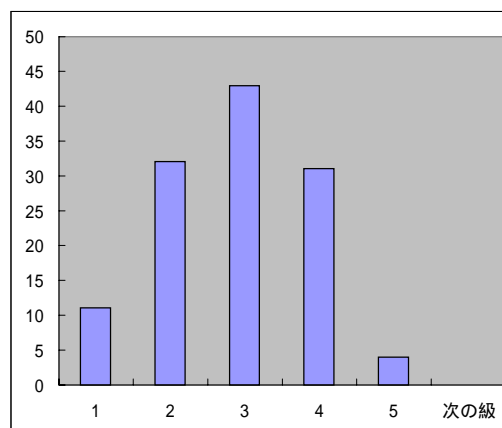
する。

### 3 - 3 観点別評価

#### 3 - 3 - 1 正確さ

誤用があった場合、文法の問題か語彙の問題かを明確に区別することが難しい場合がある。

図1 正確さ

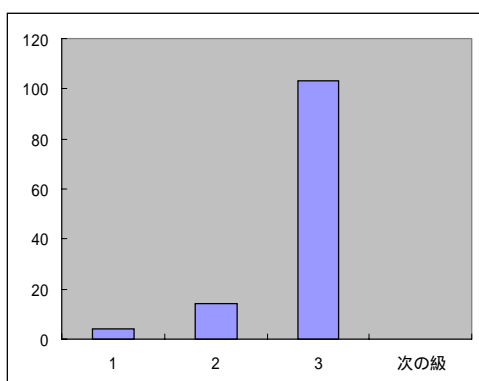


特に文法の誤用か語彙の誤用かを区別せず、また表記上の誤りも「正確さ」として減点することとした。

AIEJから報告された採点結果では、文法的能力に関しては0点と1点が全くおらず、2点が39名、3点が83名で、68%が満点であった。それに対し、今回の評価では、図1のようになり、受験生の文法的正確さのレベル差を分散させることができた。

### 3 - 3 - 2 文体

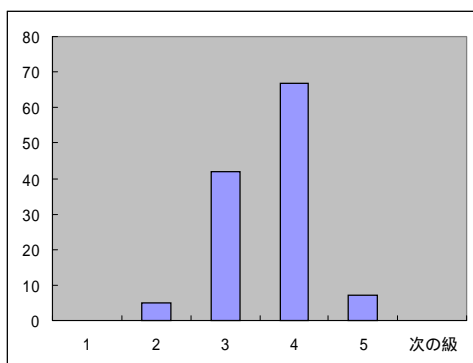
文章の中に、「である・だ」体と「です・ます」体が混在している場合、その程度によって1点及



び2点がつけられる。一貫してどちらかの文体が使われている場合、3点が与えられる。図2のように、本研究の対象者においては、満点の3点が79%と多かったが、レベルの低い日本語学習者にはこのような「である・だ」体と「です・ます」体の混在が多く見られると予想される。

図2 文体

### 3 - 3 - 3 表現の多様性



レポート等を書く場合、日常会話とは異なる表現・語彙の使用が必要となる。文法的には間違っていないが、このような文章では、不適切だと判断される語彙・表現がある。終助詞や縮約形などの話しことばの使用や「-て形」の多様などは減点対象とした。アカデミックな文章を書くためには欠かせない自動詞や使役、受身形など、また名詞化

図3 表現の多様性

した表現や専門的な用語には得点が高くなりようにし

た。今回の基準づくりで、その範囲の特定に多くの時間がかけられた。

結果は、話し言葉の使用はされていないが、表現がアカデミックな文章として不適切だと判断されたものを含む4点と、話し言葉的表現が1,2ヶ所見られた3点をもっとも多かった。



### 3 - 3 - 4 文のわかりやすさ

1 文単位で見た場合、首尾一貫しない文や表現に過不足があり、文としてわかりにくい点がないかどうかを検討した。全くない場合満点の3点が与えられる。2文までなら2点、3文以上では1点となる。全くないか、あっても2文までの学習者が大多数であった。多かったのは、条件接続の不自然な文で、レポートなどには多く用いられる条件文がまだ十分に使えない学習者が多いことが伺えた。

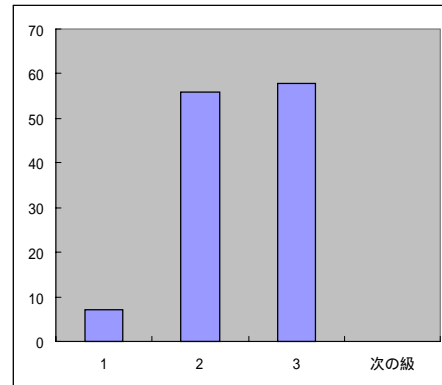


図4 文のわかりやすさ

### 3 - 3 - 5 文間の接続

文と文をつなぐ接続詞や指示詞などが、適切に使われているかどうかを検討された。特に問題がない場合が3点で、もっとも多かった。接続詞等が必要か否かの判断には、評定者の主観がかなりはたらくため、7項目中、もっとも評定者間一致度が低かったと考えられる。

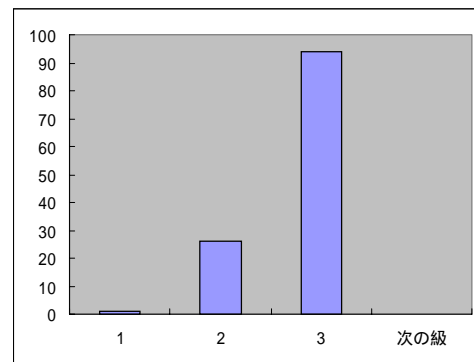


図5 文間の接続

### 3 - 3 - 6 段落間の構造

段落意識がなかったり、その構成が全くできていない場合を1点、段落は分けてあるが、意味的つながり等不適切な箇所があれば、2点となる。図6のように特に問題のない3点満点の学習者が多かった。これは、解答のほとんどが、第一段落で「私は……という意見に賛成である。」と述べ、次に「なぜならば……だからだ。」と第二段落で理由を書き、最後の段落で、「したがって……に賛成する。」というパターンで書かれていたことによる。日本語学校などの予備教育機関で

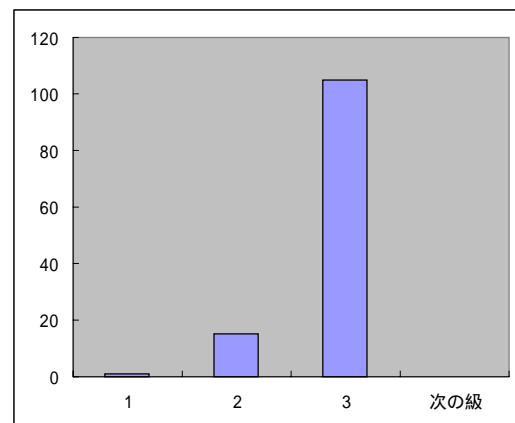


図6 段落間の構造

このパターンの事前指導が徹底していたことが伺われる。AIEJの基準では、意見とその根拠が書かれていれば、論理的能力は2点以上とれることになるため、このパターンの指導が行われてい

と考えられる。

### 3 - 3 - 7 内容

内容的に論理一貫性があるか、根拠として十分説得的であるか、反対の立場の意見に対しても配慮があるか等を考慮して 5 段階評価の基準を設定した。

AIEJの基準の「論理的能力」にあたるものだと考えられるが、根拠の有無がAIEJ基準では大きな位置を占めているが、今回の対象作文の中で

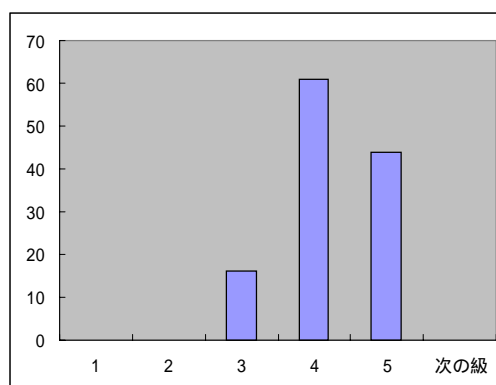


図7 内容

根拠が書かれていないものではなく、根拠そのものの論理的展開部分の評価が重要だということになった。多くの議論があったが、説得性の程度の判断には個人差がみられ、評定者間一致度が0.69と十分とは言いがたい。

### 3 - 3 - 8 合計

AIEJの基準では、0点から6点までの最大7段階評価で、満点に集中していたのに対し、今回の評価では 27 段階となり、図のように情報量が多くなった。特に天井効果の解消により、得点上位者の分布が明らかになった。

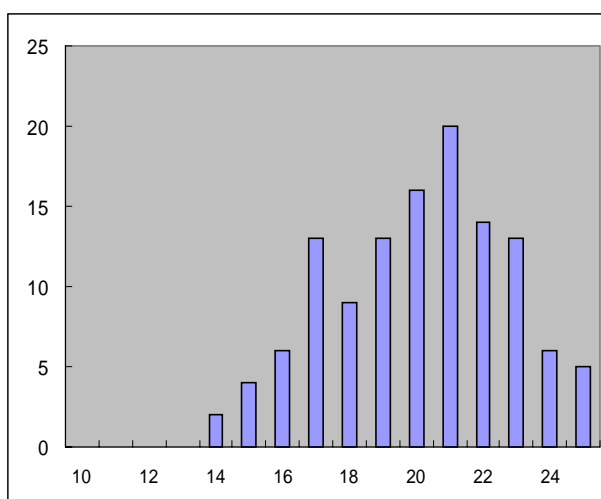


図8 合計

### 3 - 4 項目間相関

ここでは、「記述問題」評価の中の項目間相関行列から、各観点間の関連性を明らかにするとともに、AIEJから報告された他の日本語試験得点との関係や、記述問題のAIEJによる採点の結果との関連性を見ていくことにする。

#### 1) 新しい基準内の各観点間の相関

表3の中の新基準内の相互相関を見てみると、「正確さ」は他の項目と0.24から0.46の相関を示した。「語彙の多様性」と「内容」、「文のわかりやすさ」と「文間の接続」や「段落間構造」と、また

「文間の接続」と「内容」がそれぞれ弱いながらも相関が見られた。「文体」は全く他項目とは独立していた。全体に相互関連性は弱く、各項目は独自の視点から評価していることが伺える。

AIEJの採点では、文法的能力と論理的能力間の相関は、0.43あり、必ずしも独立していなかった。それに対し、今回の基準は各観点がそれぞれ別の角度から評価しているといえよう。

## 2) AIEJ基準との関係

今回の評価とAIEJの採点では、双方の合計点同士の相関係数は、0.56で、特にAIEJの「文法的能力」と新基準の合計とは0.64と高い値を示している。これは、基準関連妥当性があると判断できよう。

表3に示した通り、AIEJの「文法的能力」と新基準のほぼすべての項目との相関が見られた。「論理的能力」とは全く相関は見られなかった。今回の新基準では、日本語能力の形式的側面を「正確さ」「文体」「語彙の多様さ」「文のわかりやすさ」で、論理能力の側面を「内容」「段落構成」「文の接続関係」で測ろうとしている。AIEJの「文法的能力」は「執筆者の意図の理解可能性」と広く捉えているため新基準の形式的側面のほか、「文のわかりやすさ」や「文の接続関係」「内容」まで関連したものとなっている。反面、論理的能力は「主張と根拠が示されていることとその間の関連」に限られていることから、日本語能力の側面や段落構成、内容の説得性とは相関を示していない。課題の問題文に「どちらの意見に賛成しますか。その賛成理由を書いてください」とあるので、今回の対象者はすべて意見とその根拠を書いている。入学後に必要な論理的な文章には、さらに高度な論理展開や多角的な視点から論ずることが求められよう。反対の立場から見たときのメリット・デメリットやその問題点などが書かれていれば意見の根拠に関して説得性を増す。このような観点が全く考慮されていないためAIEJの基準による採点結果は、今回の基準による採点と相関をもたなかったと考えられる。

## 3) 日本留学試験日本語他科目との相関

本研究の121名の対象者について、AIEJから報告された日本留学試験日本語の「聴解」「聴読解」「読解」問題の成績と「記述問題」のAIEJ採点結果及び新基準による採点結果の間の相関関係をみていく。

日本語の「聴解」「聴読解」「読解」問題合計の成績とAIEJ採点間の相関は、「文法的能力」では0.35、「論理的能力」では0.22で、合計とは0.33の非常に低い値になっている。それに対し、新基準との相関は、合計点同士では、0.42の相関が見られた。これは、AIEJの採点結果0.33よりも高い関連を示している。今回の採点結果から、本研究も評価基準が、項目間の独立性をもち、AIEJ採点基準との相関も高く、他の日本語科目との相関ももつという観点からみて、十分な妥当

性を持つことを確かめた。

表3 項目間相関

	日本語筆記試験				記述採点			記述新基準採点							
	聴	聴読	読	合計	文	論	計	正確さ	文体	語彙	文	文間	段落	内容	合計
聴	1.00														
聴読	<b>0.52</b>	1.00													
読	<b>0.34</b>	<b>0.35</b>	1.00												
合計	<b>0.75</b>	<b>0.81</b>	<b>0.76</b>	1.00											
文	0.20	<b>0.32</b>	0.28	<b>0.35</b>	1.00										
論	0.10	0.22	0.18	0.22	<b>0.43</b>	1.00									
計	0.17	<b>0.32</b>	0.26	<b>0.33</b>	<b>0.82</b>	<b>0.87</b>	1.00								
正確さ	<b>0.30</b>	0.28	0.21	<b>0.33</b>	<b>0.55</b>	0.17	<b>0.41</b>	1.00							
文体	0.16	0.21	0.21	0.25	<b>0.39</b>	0.19	<b>0.33</b>	<b>0.30</b>	1.00						
語彙の多様性	0.24	0.18	0.17	0.25	<b>0.31</b>	0.20	<b>0.30</b>	0.29	0.28	1.00					
文のわかりにくさ	0.24	0.29	0.21	<b>0.31</b>	<b>0.37</b>	0.09	0.26	<b>0.46</b>	0.17	0.20	1.00				
文間の接続	0.11	0.14	0.15	0.17	<b>0.45</b>	0.25	<b>0.41</b>	<b>0.41</b>	0.17	0.03	<b>0.35</b>	1.00			
段落間	-0.05	0.03	0.00	0.00	0.25	0.28	<b>0.32</b>	0.24	0.18	0.16	<b>0.30</b>	0.29	1.00		
内容	0.29	<b>0.34</b>	0.28	<b>0.39</b>	<b>0.39</b>	0.29	<b>0.40</b>	<b>0.39</b>	0.22	<b>0.33</b>	0.29	<b>0.34</b>	0.24	1.00	
合計	<b>0.33</b>	<b>0.36</b>	0.29	<b>0.42</b>	<b>0.64</b>	<b>0.33</b>	<b>0.56</b>	<b>0.79</b>	<b>0.52</b>	<b>0.56</b>	<b>0.65</b>	<b>0.57</b>	<b>0.50</b>	<b>0.66</b>	1.00

\* 日本語筆記試験は「聴解」「聴読解」「読解」とその合計(計 400 点満点)の得点

記述採点はAIEJ)によって報告された得点{文法的能力}(3点)「論理的能力」(3点)とその合計(6点満点)

#### 4. 考察

日本留学試験で初めて導入された「記述問題」は、各方面に波及効果を及ぼすと考えられる。特に日本の大学への進学を目指す留学生や、その学習者を指導していく日本語予備教育機関にとっては、この「記述問題」の解答が、どのような観点で評価され、その結果がどのように使われるかは大きな関心事であろう。この試験で何が要求されるかは、大学入学にあたってどのような準備をするかを大きく規定することになる。したがって、大学での勉学において要求される「書く能力」と、そのための基礎能力に関する十分な議論に基づいて評価の基準が決められていかなければならない。現在、この点に関して議論が十分に進められているとは考えにくい。

学習者を受け入れる側の大学から、入学後必要とされる日本語能力に関して情報を提供し、評価基準や入学時に必要とされるレベルに関して提案をしていくことは重要だと考える。また、「記述試験」の結果が、診断的評価として有益な情報を大学側に提供しうるならば、入学後日本語を指導する教師にとっても、目標設定に大変有用な指標となりうる。このような考えに基づいて今回評価基準の見直しが行われた。不十分な点はまだ多いが、データを積み重ねながら、今後改善していくつもりである。

今後の課題としては、まず評価の観点課題による影響を受けるかについて検討をしなければ

ならない。今回の課題においても「農薬問題」のように専門的知識を持ち、反対の立場の論拠もわかっている学習者に有利な課題と、「外国語問題」のように留学生なら誰でも自分の経験から何らかの意見をまとめることが可能な課題では、特に「内容」の評価で基準の立て方に微妙な差が出てくることが確認された。これまでの日本留学試験「記述問題」を見ると、かなり課題差が大きい。論理展開の仕方の評価に関してさらに精査していかなければならない。

また、ここでは名古屋大学の私費入学試験に応募した受験生の「記述問題」のデータを分析したため、受験生全体から見れば、大きな偏りがあったと考えられる。今後より広い学習者層のデータに今回の基準が適用しうるか検討していく必要がある。

## 注

1. 国際教育協会による採点基準は以下の通りである。

### (1) 文法的能力(0～3点)

個々の文についても、文章全体についても、執筆者の意図が明快に理解可能であるもの(文法・表記上の軽微な誤りや文体上やや不自然な点は許容する。)……………3点

文法・表記上明らかに適切でない点を含むが、文章全体から執筆者の意図は明快に理解可能であるもの……………2点

文法・表記上明らかに適切でない点がかかなり目立つが、文章全体から執筆者の意図を想像することは可能であるもの……………1点

意味不明の文が多く、文章全体から執筆者の意図を理解することが不可能又は極めて困難なもの……………0点

### (2) 論理的能力(0～3点)

主張に根拠が示されており、かつ、主張と根拠との間に十分な論理的関係があり、矛盾が認められないもの……………3点

主張に根拠が示されており、概ね論理的な関係が認められるが、一部に論理的矛盾や非整合性も存在するもの……………2点

主張は示されているが、その根拠が示されていない、又は、根拠が示されていても、論理性・客観性を著しく欠いているもの……………1点

筆者自身の主張が示されていない、又は、何を主張したか曖昧であるもの……………0点

2. 国際教育協会ホームページ:

[http://www.aiej.or.jp/examination/efjuafis\\_description\\_q.html](http://www.aiej.or.jp/examination/efjuafis_description_q.html)

## 文献

- DeRmer, M. (1998). Writing assessment: raters' elaboration of the rating task. *Assessing Writing* 5(1) .7-29
- Hamp-Lyons, L. (1991) Reconstructing "Academic Writing Proficiency" In Hamp-Lyons, L. (Ed), *Assessing second language writing in academic contexts*. (pp.127-153).: Ablex,
- 菊地康人 (1987) 「作文の評価方法についての一私案」『日本語教育』63号 pp.87-104
- 小嶋秀夫・村上 隆 (1991) 「名古屋大学教育学部における論述的学力検査」『大学入試における実技・面接・小論文に関する研究』平成 2 年度文部省科学研究費補助金(総合研究(A))代表者:岩坪秀一 成果報告書
- 小室輝代他 (2003) 「日本留学試験記述問題の評価基準の提案とその信頼性」『言葉と文化』5号
- 丸山千歌 (2003) 「日本留学試験実施前の学部留学生の日本語(書き方)の課題」『横浜国立大学留学生センター紀要』10号
- 三谷閑子他 (2003) 「作文の評価手順が評価に及ぼす影響 analytic scoring の採点に関して」『言葉と文化』5号
- 森田富美子 (1981) 「作文の評価」『日本語教育』43号 17-33
- 村上京子 (2003) 「学部留学生の大学生活における日本語運用上の困難と課題」名古屋大学留学生センター紀要 5-17
- 二通信子 (2001) 「アカデミック・ライティング教育の課題 日本人学生及び日本語学習者の意見文の文章構造の分析から」『北海学園大学学園論集』110号
- 齊山弥生 (1994) 「大学に学ぶ留学生のための作文評価試案」『産能短期大学紀要』第27号 pp.67-77
- 平 直樹 (1991) 「小論文試験の方法論的諸問題に関する研究の動向について」『大学入試における実技・面接・小論文に関する研究』平成 2 年度文部省科学研究費補助金(総合研究(A))代表者:岩坪秀一 成果報告書
- 田中真理他 (1998) 「第二言語としての日本語における作文評価基準 日本語教師と一般日本人の比較」『日本語教育』96号